空賊物語?

神無月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
空賊物語？

【Ｎコード】
Ｎ０５１０ＢＡ

【作者名】
神無月

【あらすじ】
これは――――若き空賊が、一人の麗しきヴィエラの美女と出逢う物語である。

カム・アゲイン☆chapter1☆

バルフレアは閉口して、椅子の背もたれにギシリと身体を乗せた。テーブルの上には、さっきからじろりとこちらを睨みつけているモーグリのノノが、土足で仁王立ちしていた。
「……」
俺が何度忠告してもききやしない。
この小さなモーグリ族のノノは、俺に文句を言うときは、決まってテーブルの上に土足で仁王立ちだ。
いつもは、かわいいクリクリした目尻が、キッと釣りあがっている。といっても、愛らしい容姿をした彼が怒ったところで、俺は別になんとも思わない。
むしろ、コロコロ変わるノノの表情がおもしろい。
まあ、そんなことは口が裂けても本人には言わないけど。
「なあ、そこ……」
俺はだるそうに身体を背もたれにあずけたまま、テーブルの上を指した。
「食事したりする場所だろ？土足はいかがなものかと……」
言い終わる前に、ダンッとノノの小さな足がテーブルの上で跳ねた。
「今はそんな話をしてるんじゃないクポーーッ！」
「はいはいはいはいはい」
俺はピシリと姿勢を正して、椅子に座りなおした。
「これで何度目クポ！？バルフレアの所為で、シュトラールはガタガタクポ！」
「はい、すみません」
「無茶な操縦ばっかりさせてたら、ホントにいつか、飛べなくなるクポ！それは何度も説明してるクポ」
「はい、わかってます」
「だいたい、あの飛空挺(ふね)を操縦するのは一人じゃ無理クポ。ちゃん

と、副操縦が必要だクポ。なんども言ってるクポ？それなのに、一人でやろうとするから、大体無茶をする羽目になるクポ」
「はい、気をつけます。細心の注意をはらって……」
「違うクポ！」
俺の正していた姿勢が徐々に、ぐったりと崩れ始める。
「ボクが言いたいのは、もう一人、副操縦が出来るヒュムが必要だって言ってるクポ」
「だーかーらー」
俺は、ついにまた椅子にぐだっと倒れこんで、頭を抑えた。
「それは、嫌だっていってんだろ？」

空賊家業をするようになり、数年。
気付けば、いつの間にか、俺には高額な賞金がこの首にかかっているようで、それを狙う賞金稼ぎが後を絶たない。
まあ、ある程度、力のある空賊にとってそれは避けられないことではあるが、
急激に俺の首が高額になったのには、帝国からの圧力がかかっていると考えて、まあ間違いなさそうだった。
高額賞金首の空賊が、元ジャッジだったとしたら…。
その首を捉えた賞金稼ぎはさぞかし愉快だろう。
始めた頃の気楽な空賊業とは異なり、ここ数年はずっと執拗に賞金稼ぎにも狙われるようになって、
俺もずいぶんと気ぜわしい。
いつもは、賞金稼ぎに見つかるとさっさと逃げるのだが、
今日現れた賞金稼ぎは、ここ最近頻繁に現れるようになったバンガ族の男だった。
名前をなんていったっけ？
そうそう、バッガモナン。
結構、やたらしつこくて、やたらやかましくて、あまりいい噂を聞

かない。
まあ、賞金稼ぎなんてもともとそういうもんだけど、そのバンガはちょっと異常だった。
しつこい癖に、どことなくそのやり方が馬鹿っぽい。
ちょっと退屈していた俺は、からかってやれ、とショとラールを急旋回させて、バッガモナンのトロそうな飛空挺を掠めてやった。
捕まえられるもんならやってみろ。
俺は舌をだして、不意をつかれて慌てふためく人相の悪いバンガを笑った。
しかし、そのバンガもただの賞金稼ぎではなかったらしく――――
さらに、シュトラールを旋回させ前方を見て、唖然とした。
わらわらと、仲間だと思われる賞金稼ぎの飛空挺がいきなり姿を現していた。
どうやら、あのバンガは、俺を捕まえる為にその少ない脳で作戦を立ててきたらしかった――――
「しつこいバンガがいるって言ったろ？それに捕まったんだって……振り切るときにちょっと……ね」
「バッガモナンのことクポ？そんなの今に始まったことじゃないし、バッガモナンの飛空挺になんてあのシュトラールが負けるはずないクポ」
「だって、マジでしつこかったんだって……仲間の飛空挺が隠れててさ、わらわら出てきて一斉攻撃だぜ？」
「どうせ、調子に乗って、挑発したんだクポ？どうして、もっと大人しくできないクポ？」
「たまにはさぁ、ちょっと憂さ晴らしっていうか……魔がさしたっていうか……」
「それ、女と同じクポ？」
「は？」
「だいたい、バルフレアはいつもだらしないクポ。」
ノノの怒りは今回もそうとうしつこい。

だいたい、シュトラールが故障すると、ノノは激怒する。
ただ、今日は日頃のストレスがよっぽど溜まっているのか、今回の件とは関係のないことまで引き出してぐちぐち言い出した。
俺は、ぐったりとしたまま、ノノの怒りを受け続けていた。
ノノは、俺の飛空挺シュトラールの専属機工士だ。
そして、世界最速の飛空挺を造る事を日々目指している研究熱心なモーグリだ。
元々はレベッカの元で専属機工士主任をやっていたが、俺と出逢って以来行動を共にしている。

「……とにかく、シュトラールには、もう一人副操縦士が必要クポ」
なんとか、話を軌道修正し、今日、何度も言っている台詞をノノはもう一度俺に言った。
「とにかく、それは断る！」
俺は、話にならないというように手を煩そうに振った。
「ダメクポ」
「ちょっとまてよ、冷静になろうぜ？なぁ、第一、副操縦士を仲間に入れるってことは、稼ぎの取り分も減るってことだぜ？ノノ、お前の夢は最速の飛空艇を造ることだろ？このシュトラールよりも。多額のギルが必要になるだろ？　それなのに、取り分減らしてまでもう一人雇うなんて馬鹿げてると思わないか？」
「シュトラールが動かなくなったら、それこそ、もともこうもないクポ！！」
「だから気をつけるって」
「ダメクポ！副操縦士を入れるクポ」
あーあ、また堂々巡りだ。
俺は、フーと溜息をついて、椅子から立ち上がった。

「どこいくクポ？」
「もう、いい時間なんだ、寝ろ」
「まだ話は終わってないクポ！」
「腹が減ったんだよ！飯食ってくる」
「バルフレア！！」
ノノの怒鳴り声を聞きながら、俺は扉を閉めた。
外に出ると、青い空にぽっかりと銀色の月が浮かんでいた。
他のヒュムと一緒に仕事なんてしたくない。
そういうのは煩わしい。
もう、俺はジャッジではない。
帝国の人間でもない。
地位も名も家族も、なにもかも捨てた。
俺はどこにも属さない自由なんだ……。
いまさら、どんなしがらみも欲しくない。
俺は最近イラついていた。
アルケイディア帝国が、侵略戦争を周辺諸国にふっかけ、強大な軍事力で侵攻を繰り返している。
力のない小国は支配下にされていく……。
そんな話を聞くたびに、俺の中で消し去ったつもりの、忘れたくて仕方がない記憶を突かれるようでイライラしていた。
イラついていたから、だから、あの賞金稼ぎを挑発したりした。
最愛のシュトラールで、思い切り飛ぶことはなにより心が安らぐ。
すべてを忘れられる。
もっと速く、もっと速く、もっと高く、高く。
もっと自由に、飛びたい。
空を支配しているような気分。それだけが、俺の……。
「副操縦士？……冗談じゃない」
俺は月明かりに照らされた白い道を、繁華街へ向けて歩き始めた。

カム・アゲイン☆chapter2☆

シュトラール修繕の為足止めを食らったこの街に滞在するようになって、数日が過ぎていた。
ブーブー文句を言っていたノノも、俺がまともに相手にしないものだから、諦めたのかあれ以来、何も言ってきていなかった。
だから、俺はすっかり、そのことは忘れていた。
その日も、酒場でいつものように酒を飲んでいた。
世の中が戦乱に向かって騒ぎ立てていても、変わらないものは変わらない。
賊と分類される連中はもともと世の中のあぶれ者で、その生活事態が日々戦争みたいなものだ。
つまり、世間が何をしようが、どうなろうが、俺達には関係がないってわけだ。
むしろ、勝手にやっててくれってことだ。
俺は最近頻繁に通うようになった酒場で知り合った女と親密な関係になりたくて、いつものように、酒を飲みつつ女を口説いていた。
シュトラールと酒と女。
これだけ揃えば何も言うことなんてない。
そろそろホテルにでも行こうか？なんて酒場を出ようとしたまさにその時、
聞き慣れた、むしろ聞き飽きた少し甲高い声が、店内の喧騒の中、聞こえた。
「バルフレア！」
俺は気付かないフリをして、傍らの女の腰に手を廻した。
女はちょっと恥ずかしそうに身を捩る。
その仕草が、余計そそられる。
「バルフレア！」
息がかかる程顔を近づけて、でもお互いの顔がよく見える距離で、

相手が喜びそうな言葉を囁く。
女は魅惑的な上気した笑顔で、俺を見上げる。
よし、これからが本番。
「バルフレア！！」
だんだん近づいてくるその甲高い声の持ち主は、足元までくると俺のズボンをぺしぺし叩いた。
「なんなんだよ！！」
俺は舌打ちしながら、振り返るとノノが、上気した顔で俺を見上げていた。
「きゃーかわいい～」
ノノに気付いた女の子達が騒ぎ始める。
これからって時に、コイツは……。
俺は、女の腰に廻していた腕を解くと、「ちょっと待ってて？」と彼女に極上の笑顔で謝ってから、
片手で、ノノを吊るし上げるようにして持ち上げた。
「何しにきた！？」
声を押し殺して、それでも十分迷惑だと伝わるように、ノノを睨みつけた。
「バルフレア！大変クポ！」
ノノは、そんな俺のことなんて、全然気にならないようで、クリクリした目をキラキラさせて言った。
「すっごい美人クポ！」
「は！？」
「すっごい美人を連れてきたクポ！」
「な……なにを……い」
「すっごい美人！女好きのバルフレアもきっと気に入るクポ～！」
「……！」
俺は慌ててちらりと、今夜、せっかく苦労して口説き落とした女を振り返って見た。
女の顔は明らかに不審げなものに変わっていた。

「おまえね…」
俺は、掴んでいたノノの首筋に力を込める。
「だって、バルフレアの女好きは本当のことクポ？それに美人クポよ？」
もう、俺は完全に後ろを振り返る気力を失った。
「おまけに、ヒュムじゃないクポよ？」
「いったい何の話……」
「副操縦士の話だクポ」
「副……？」
俺は、すっかり忘れていた単語が飛び込んできて、酔いまで吹っ飛びそうだった。
「まだ、そんなこと……」
「あれから、ずっと探してたクポよ！それで、やっと見つけたクポ！これほどの条件はないクポ」
「どんな好条件だろうと、誰だろうと、副操縦士なんて雇うつもりはないって言ったろ？」
「美人クポ」
「美人、美人、ってお前ね……。ノノの好みがどうだか知らないけどね、俺、一応女には苦労してないんだけど？」
「でも、振られたクポ？」
ノノが俺の背後をちらりと視線を向けて、にやりっと笑った。
こいつ……絶対わざとだな？
「……お前、よっぽど俺に恨みがあるようだな？」
「当たり前クポ。ボクの大事なシュトラールを乱暴に扱うなんて許せるわけないクポ」
「この飛空挺マニアめ、それに、シュトラールは俺のだ」
「メンテナンスも碌にできもしないくせにエラソーに言うなクポ。ボクがいなきゃ、とっくにオシャカになってるクポ」
「なんだと……」
「とにかく、もうこれで安心クポ。

優秀な副操縦士が見つかったクポ。
それに、彼女が飛空挺を失ったのは、バルフレアの所為だし、無下に断れないクポよ？」
「何を言っているのか、さっぱりワカリマセン」
「とにかく、一度会ってみるクポ！彼女もシュトラールのこと、とっても気にいってくれたクポ」
「何勝手に話進めてんだよ？
調子に乗ってんじゃ……」
「ノノ？」
その時、店の扉が開いて、ハスキーな低めな声がノノの名前を呼んだ。
確かに、ノノの言っていることは正しかった。
そこには、店内が一瞬しんと静まり返る程、美しいヴィエラ族の女が立っていた。

カム・アゲイン☆chapter3☆

「………」
シュトラールに帰ったきた俺は、目の前で仲良さそうに、のんびりとお茶など飲んでいるノノとヴィエラを前にして、さてどうしたものかと腕を組　んだ。
「このお菓子、おいしいクポよ」
ノノは、缶の中から、菓子をご丁寧にも小皿に分けながら、いそいそとヴィエラに勧めている。
「ありがと」
笑顔を浮かべるでもなく、淡々とした感じでそういうと、ヴィエラはじっとその菓子を見ていた。
長い睫の下からは、深い赤い瞳が艶やかに覗いていた。
褐色のなめらかそうな肌。
波打つような白銀色の長い髪。
凝った繊細なデザインの防具。あのデザインはどこの国のものだろうか。
少し露出が多いような気がする。
褐色の程よい肉付きの太腿、盛り上がった胸の稜線。細くくびれた腰。薄い生地の布から透けて見える腹部が妙に艶めかしい。
なんとなく、目のやり場に困る。
「あの……」
俺が声を出すと、そのヴィエラは、ぱちっと赤い瞳をこちらに向けた。
なんとなく邪心の無いキョトンとした表情…。
見慣れない赤い色の瞳に、俺はなぜか焦る。
「ああ、ええ……と」
「フラン、ていうクポ」
「ああ、そう、……そうそう」

俺は曖昧に頷いてヴィエラをチラリと見て、ガツンと赤い目にぶつかって慌てて視線を、なるべくわざとらしくないように気を付けながら、逸らし　た。
本来ならノノに向かって、怒鳴りちらしたいところだが、このヴィエラがいる手前、そんなことは出来ない。
どうも、調子が狂う。

「あのさ……なんとなくは、状況がわかったと言えば、わかったんだけどさ……なんで……俺の所為なんだ？」
「だから、バッカモナンにバルフレアがちょっかい出して派手に暴れまわった所為で、たまたま、近くを飛んでいたフランの飛空艇が巻き込まれて、墜落。飛空艇は大破クポ」
ノノは小さな腕を上げ下げして墜落から大破するまでを手振りしてみせた。
「はあ……」
「つまりは、バルフレアのせいで、フランは大事な商売道具を失ったわけだから、助けてあげるのは当然クポ？クポポ～！飛空艇を失って、困っていたフランをボクが見つけたのはラッキーだったクポ。ボク達もちょうどフランのような人を探していたクポ～。だから、次の飛空艇をフランが手に入れるまで、一緒に仕事をしようってことになったクポ～」
ノノは「ね～」とにこにことフランに笑いかけ、かわいらしく首を横に倒した。

ね～

なるほどね～……
っておいこら！
「いやいやまてまて！だから、なんでそれが俺のせいになるんだ？
　そもそも飛空艇が墜落したのは……」

言いかけて、はっとする。
ああ、全く！また赤い瞳がこっちを見てるよ……
「墜落したのは？」
ノノが冷たい視線を俺に向ける。
「つ、墜落したのは……あの賞金稼ぎが…で、それは…俺の…所為か」

俺は、あんなバッガモナンなんかの攻撃を避け切れないパイロットの腕に問題があるだろ！
という叫びを必死で飲み込んだ。
もう、これ以上何を言っても無駄なようだ。
まあ、次の飛空挺を手に入れるまで――とはいえ、ノノはずっとこのヴィエラに副操縦士としていてほしそうだったが――の辛抱だ。
その話題は出なかったから、今回はそういうことで俺が折れるしかなさそうだ。

「わかったよ、ノノ」
俺はそう言って、両手を上げた。
ノノはぴょこんと耳を跳ねさせて、俺に向かって笑顔を見せた。
「よかったクポ！フラン！部屋は空いてるから自由につかかっていいクポ～！あ、部屋を用意してくるクポ～」
ノノは、椅子から飛び降りるとパタパタと駆けて部屋を出て行った。

ノノがいなくなって、俺はヴィエラと二人きりになった。
このヴィエラは、ここに来て殆どしゃべっていない。
なんとなく、キョトンとしたような表情で、ノノと俺を交互に見ていただけだ。

まあ、無口なのは助かる。

ヴィエラか…。
実際に、ヴィエラ族を間近で見るのは初めてだった。
ヒュムに似ているが、ヒュムにはない長い耳。
閉鎖的な種族だと聞く。
昔と違って今では、ちらほら色んなトコロでヴィエラを見かけるようにはなったものの、一般的に社交的ではないようで、やっぱり、ヴィエラについては謎な部分が多い。
まあ、おれ自身興味もなかったから、今日からヴィエラとこうしてこれから一緒に仕事をすることになるという状況が不思議だった。

一緒に…？
そうか、寝食も共にすることになるんだろうな。
一応、女だしな…。

俺は、彼女を見た。
ヴィエラは妖艶だと言われているが、なるほど、その通りだ。
刺激的な色気というか、あの眼だな…なんか惹き付けられる。あの深い赤い色に…。
…って何を考えてる？俺？

俺は、なんとなく咳払いをして、ヴィエラに話しかけてみた。
「騒がしくて、しょうがないな……あいつは……。ノノは、副操縦士を切望していてね。あんたを見つけてひどく喜んでいるよ」

「心配しなくてもいいわ」

ヴィエラが初めてまともに口を利いた。
でも、意味がよくわからない。

「え？」

「そんなに長居はしないから」

そう言うとヴィエラは立ち上がった。

すらりとした長身の彼女は、俺を見て、微かに笑った…ように見えた。

「飛空挺なんて、あっても無くてもよかったの。たまたま手に入れたから使っていただけだし…」

「え…ああ、そ…う」

「手荷物のすべてを飛空挺に積んでいたから…。ちょっと不便だっただけ。ごめんなさいね、次の場所へいく準備が整い次第、出て行くから」

「………」

俺は、彼女が話すのを聞きながら、ぼんやりと「そうかすぐに出て行くのか」となぜか残念に思った。

…なんで残念？

低い声。

しっかりと鍛え上げられた身体。

でも、女の身体特有の丸みもあって、男でなくても思わず見とれてしまうくらい美しく綺麗なボディ。

なのに、ほとんど変わらないような表情の中に、ふっとあどけない表情が一瞬見え隠れする。

…ような気がする。

さっき、笑ったように見えた表情もそうだ。

俺は彼女から目が離せないでいた。

ヴィエラがふっと目を細めて「どうしたの？」というように微かに

首をかしげた。
ずいぶん、黙ったまま彼女を見ていたことに気付き、俺ははっとした。

「あ…ああ…そ、そうなんだ。じゃ、まあ、それまで、ゆっくりすればいいよ、ちょっと窮屈かもしれないけど…」
覗き込むような瞳に身竦められて、俺は、ヴィエラから目を逸らした。

「あーっ！フラン！気をつけるクポ！バルフレアは女と見ると見境いがなくなるクポよーー！」

いきなり部屋に入ってきた、甲高い大声に俺は飛び上がる程驚いた。
「フラン、大丈夫だったクポ？」
「どういう意味だよ！？」
ノノは、俺の質問を完全に無視して、ひょこひょこ小さな身体を揺らしながらヴィエラの足元まで駆け寄った。
「部屋の用意ができたクポ。ちょっと狭いけど好きに使っていいクポ～」
「ありがとう」
そう言って、ヴィエラはノノにふわりと笑いかけた。

それを見て、俺はまた焦った。
なんか、おかしい。
容姿や声やヴィエラであることや、そういうのをひっくるめても、不釣合いな表情。
どことなく、守ってやりたいような、儚げな感じがしてならない。
そして、なんか胸がざわつく。

「ほら～やっぱりいやらしい目で見てるクポ～」

「あ！？」
ノノが俺を見て、ふうと息を吐いて、ヤレヤレと言うように短い両手を開き肩を竦めた。
「さっきから…お前ねぇ…」
「フランに手を出したら許さないクポよ？」
「ばっ…馬鹿か」
俺は、ジロリと失礼なモーグリを睨みつけた。
こいつが優秀な機工士でなければ、即叩き出しているところだ。
「まったく、くだらないこと言ってんじゃねぇよ！」
顔を顰める俺を置き去りにして、ノノはフランの手を引いて部屋から出て行った。
閉じた扉越しに、楽しそうなノノの声がゆっくり遠ざかっていく。
俺はぐったりとした気分になり、近くにあった椅子に腰掛けた。
手を出すって…相手はヴィエラだぞ？
俺はそこまで物好きじゃないし、そもそも女に苦労なんてしていないんだ。
それをなんで好き好んでヴィエラ族に…。
いやいや、俺は何を真剣にこんなこと考えてるんだ？
あり得ないことを想像してどうする？
「あーもー疲れた…」
とにかく、明日からちょっと面倒くさいことになりそうだ…と思いながら、溜息をついた。

カム・アゲイン☆chapter4☆

「フランはすごいクポ～」

ノノがすっかり感心した表情で言った。
感心した表情…というよりは、陶酔しきっているといっても過言ではない。
もう、ここ最近、何回も何回も繰り返される、この賞賛をたっぷり込めた言葉に、俺はすっかり呆れて溜息を漏らす。

ヴィエラ族のフランが、俺らと一緒にいることになって、１週間が過ぎていた。
夕食を摂る為に入ったその酒場で、さっきから俺は酒を飲みながら、大して旨くもないツマミを突いていた。

「フランの腕はたいしたものクポ。弓矢の使い方はどこで習ったクポ？それに、シュトラールはちょっと癖のある飛空挺なのに、あんなにすぐにコントロール出来るなんてさすがクポ！ほんとに驚いたクポ～」

言われているヴィエラは…というと、いまいち掴みどころのないような表情で、もくもくと食事をしていた。
そして、時折、ノノに向かって相槌を打ったり、小首を傾げたり。
酒も結構飲んでいるようだが、一切顔にはでていない。

適当に選んで入ったこの店は結構繁盛しているらしく、そこそこ広い店内は混みあっていた。
ヒュムに、バンガに、シーク。
それぞれの種族でごった返してはいるが、一つのテーブルに、ヒュ

ム、モーグリ、ヴィエラが一緒にいるのは、
当然俺たちだけだった。
そして、どうやら、俺たちは目立っているようだった。
まあ、無理もないことだ。
そもそも、呑み屋に来るモーグリだって珍しい。
そこへ、ヴィエラも一緒にいるんだから、いやでも目につくだろう。

ちらちら、寄せられる視線を感じて、俺は乱暴に突き刺したフォークを投げ出し、溜息をついた。
やっぱり、なんとなく落ち着かない…。

しかし、ヴィエラはそんな周りの視線など、全く気にする様子もなく、ただ、淡々と食事をしていた。
たいした度胸だ。
もっとも、慣れているんだろうな…と思う。

ノノの連れてきた副操縦士。

このヴィエラ。
とんでもないヤツだった。

儚そう…？
まったく前言撤回だ。

しなやかそうな体型をしているし、ずっと一人でやってきたっていうから、まあそれなりの腕はあるんだろうとは思っていた。
が、想像を超えていた。
恐らくヴィエラ特有の優れた身体能力……なんだと思う。
実際、俺はヴィエラのことをよく知らないから、すべてのヴィエラに言えることなのかどうかわからないが、

敏感だった。

はじめて2人でお宝を探しに行った時の帰り道、モンスターに出くわした。

敵の気配をいち早く感じ取ったフランは、俺を振り返りいきなり言った。

「私が接近するから」

「え？」

「貴方は背後から援護してくれる？」

そう言って、フランは敵の前に飛び出していった。

俺は慌てて、銃を構えはしたものの…。

彼女の俊敏な動きと、鮮やかな攻撃に、援護射撃なんて忘れて、ただ、そのしなやかな動きに見とれてしまった。

彼女は巧みに敵の攻撃をかわしつつ、絶妙なタイミングで敵の急所を突き、倒した。

息絶えたモンスターの傍らに立ち、ゆっくりとこちらに顔を向けた彼女を見て、俺はひどく現実離れしている…そう感じた。

静かな赤い瞳。

息もちっとも乱れていない。

冷静な…むしろ冷淡だと感じるほど、何も映さない表情…。

その足元には死骸が一体転がっている。

「…なるほどね、女一人で空賊業をやってたってのは、嘘じゃなかったってことか」

俺は、構えかけていた銃を下ろして、ゆっくり彼女に近づいた。

フランは、微かに首を傾げた。長い髪と耳がそれに合わせてほんの少し揺れる。

「たいした腕だな…援護射撃なんて、必要ないって感じだな？」

「………貴方が間接攻撃が得意だと思ったからよ」

彼女は、長い腕をすっと上げて、俺の銃を指差した。
「気に入らなかった？」
「とんでもない。よく分析してらっしゃる。でも、あんたも間接攻撃派じゃないのか？」
「…どうかしら？」
「まあ、いいけど…」
俺は彼女の足元に転がっている死骸にちらりと目をやり、足を進めた。

たしかに、俺には銃があるから、間接攻撃派といえばそうだし、銃捌きにおいてはかなりの自信もある。
だが、格闘や接近戦もそれほど不得意ではない。
見た目より腕力もあるほうだと思う。

しかし…
そう。だからこそ。
彼女の攻撃能力の高さがわかって、驚いた。
あの、細い身体のどこからあんな力が出てくるのか…。

彼女をとんでもないヤツだと思ったのは、それだけではない。

彼女の今までの戦利品を見て、俺は舌を巻いた。
ヴィエラ族は長寿の種族だということは知っていた。
だから、当然、俺よりも経験もあり、なにより長い時間を生きているわけだから、そんな彼女の所持しているお宝に、どんなものがあるのか？というは、ものすごく興味があった。
しかし、
今もまだ、解明されていないだろうと思われていた秘宝をいくつも所持してたことは、さすがの俺も驚きを隠せなかった。

「え？　あの宮殿の！？…ってことは、そこにもう秘宝ないのかよ？」
驚きすぎて、思わず馬鹿なことを口走ってしまう。
そんな、俺に、彼女はひどく真面目そうな顔で言った。
「ないわ。私が持っているもの」
「………」
いつか狙おうと思っていたというのに…。
その日、幾つかの俺の夢は無残に打ち砕かれた…。

さらに、機工士としての技術も知識もなかなか…で。
実際は、「なかなか」なんてもんじゃない。
当然、ノノはさらにフランに夢中になった。

ノノは、異常なくらい飛空挺について詳しい。飛空挺マニアだと言っていいだろう。
古い型から、最新のものまで、ノノの知らない飛空挺はないと言っても過言ではない。
俺も、そこそこに飛空挺の知識はある。まあ、人並みよりは上…という程度だ。
ノノの知識の深さにはさすがに追いつけない。
しかし、フランは、ノノの専門的な会話に付いていっている。
非常にマニアックな内容にまで…。。
俺は、思わず、飛空挺について、ごきげんで話し続けるノノを複雑な気分で眺めた。
楽しくて仕方がないといった様子の機工士のノノ。
しかし、ノノが喜んでいるのはそれだけではない。
それは、シュトラールのことだ。
彼女は、初めて乗ったとは思えないほど、シュトラールをコントロールするのが巧かった。
シュトラールは結構クセがある。
シュトラールを乗りこなすには、経験とそれなりの腕がなければ無

理だ。
すぐに機嫌を損ねるし、微妙なコントロールを怠ると、あっという間に失速する。
巧くコントロール出来れば、イヴァリースでこれほど速く飛ぶ飛空挺はない。
そのずば抜けたスピードの副作用のようなものだ。
それなのに…。

今までどんな飛空艇に乗っていたのか知らないが、あっさりと彼女はシュトラールを操る…。

「バルフレア！フランはすごいクポ～？」
「はいはい、」
「クポ！ちゃんと聞いてるクポ？」
「聞いてるよ…」
俺は投げやりに言って、グラスに酒を注ぐと、ぐいっと煽った。
「クポポ～」
「なんだよ」
「飲みすぎクポ～」
「いつものことだろ？ほっとけ」

ノノは、くりくりした黒い瞳で、じっと俺を見た。
「なんだよ？」
「相談があるクポ、バルフレア。最初は、新しい飛空挺を手に入れるまでの間、フランと一緒にいるってことになってたクポ？でも、……これからもずっと一緒にいるってことにしないクポ？」

PDF小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0510ba/

空賊物語?

2012年1月3日02時48分発行